

## CONTENTS

Opening essay:  
Kaigai-zemi(International Joint Project) as an Educational Tool  
[*Shigeto Sonoda*]—— i

### Faculty Papers

Literacy and Ethnography on Mobile Media :Case Study on one Performative Classroom: Mobile Media Studies with Comparative Cultural Approach  
[*Shin Mizukoshi, Kyoung-hwa Yonnie Kim*]—— 1

Grundrechtskonkurrenzen im Verhältnis eines umfassenden Grundrechts zu den besonderen Grundrechten - Zu Auffangfunktion, Schutzergänzungsfunktion und Idealkonkurrenzen des Art. 2 Abs. 1 GG im Verhältnis zu den besonderen Grundrechten  
[*Shuji Sugihara*]—— 19

Value Creation of Japanese Private Mediations Movements : An Empirical Study  
[*Hideaki Irie*]—— 79

Journalism Marketing  
[*Tomoaki Ide*]—— 107

Business-Academia Cooperation in Fashion Education  
[*Jin Nakamura*]—— 135

### Refereed Papers

Expanding Political Participation by Revising Laws and Using ICT  
[*Masami Honda*]—— 147

The divergence of hierarchy and power relations within fan community:A case study on Johnny's fans in Taiwan  
[*Hui-chien Pang*]—— 165

Media discourse on migrant women in South Korea : The "Othering" process in mass media journalism  
[*Misook, LEE*]—— 181

### Field Review

Making opportunities to develop interactive communication and human resources for safety of "drugs and dietary supplements"  
[*Satoko Hori, Yasufumi Sawada*]—— 197



情 報 学 研 究  
JOURNAL OF INFORMATION STUDIES

# 学環

## 思考の環

「海外ゼミ」という教育ツール [園田茂人] — i

## 教員研究論文

ケータイのリテラシー・ケータイのエスノグラフィー [水越 伸・金暲和] — 1  
——パフォーマンス型授業  
「モバイルの比較文化的メディア論」の事例研究——

包括的基本権と個別基本権の競合 [杉原周治] — 19  
——基本法2条1項の個別基本権に対する「受け皿的機能」、  
「保護補完機能」、「観念的競合」をめぐるドイツの判例・学説の展開——

事例に見る民間調停の価値創造 [入江秀晃] — 79

ジャーナリズム・マーケティング [井出智明] — 107

ファッション教育における実務家等の関与に関する一考察 [中村 仁] — 135

## 査読研究論文

法改正と ICT の利活用による住民の政治参加の促進 [本田正美] — 147

ファン・コミュニティにおけるヒエラルキーの考察 [龐 恵潔] — 165  
——台湾におけるジャニーズ・ファンを例に——

マスメディアにおける他者化言説の形成過程 [李 美淑] — 181  
——韓国の結婚移住女性に関する時事報道番組を中心に——

## フィールド・レビュー

「薬と健康食品」の安全確保のための場・ネットワークと人作り [堀 里子・澤田康文] — 197



# 思考の環

OPENING ESSAY

# 「海外ゼミ」という教育ツール

「海外ゼミ」—筆者が研究指導をする学生の一部を引率し、東アジアの諸大学を訪問して研究交流活動を行う一連のプロセスとこうよぶが、この「海外ゼミ」が始まってから、かれこれ10年弱の月日がたつ。

2000年の11月16日から19日にかけて、3泊4日の旅程で中央大学の学生8名を引率して香港の香港中文大学を訪問してから、2009年の

2月18日、19日と韓国・高麗大学で開かれた4大学共同ワークショップに早稲田大学の院生を参加させるにいたるまで、「海外ゼミ」はダイナミックな展開を遂げてきた。その時々で、参加する学生の顔ぶれや彼らの関心、訪問先、研究活動の内容は異なるが、そこには一貫して「海外ゼミ」の「精神」が流れてきた。

## 現地学生との交流という困難：香港訪問（2000年）の残した課題

「海外ゼミ」は突然始まった。私の専門が中国・アジアであるにも関わらず、社会学の授業やゼミでは中国・アジアが紹介されていなかったことから、「先生、どこかに連れてって!」と、ある女子学生が叫んだことが発端だった。

2000年のゼミ生は23名だったが、そのうち「海外ゼミ」に参加したいと意志表明した学生は8名。3名に1名が「海外ゼミ」に関心を示したことになる。

8名の学生たちが考えたのは、海外にいった後に、現地の学生と討論をしたり、報告会をしたりといった交流がもてること。そのために、どのような準備をしたらよいのか、学生自身は

よく理解してはいなかったものの、「興味深いテーマでこちらが話をすれば交流は進むはずだ」と考えた学生たちは、海外の学生たちが関心を示しそうなテーマを選ぶことに腐心した。

訪問先を香港に決めた学生たちは、モデルがない状況の中で、精一杯の努力をした。事前の下調べをし、香港でのスケジュールを考える者やチケットの手配をする者も現れた。

ところが2000年の11月18日、香港中文大学社会学系を訪問し、学生が報告する会場に現れた学生はゼロ。2、3名の教員はいたものの、現地学生と交流するという目標を果たすことはできなかった。

## 捲土重来の香港再訪（2001年）：経験の蓄積という成功要因

2001年のプロジェクトは2000年の「海外ゼミ」に参加した学生を中心に進められることになったため、学生たちは何をすべきかを理解していた。

前回の轍を踏まない。学生たちは、時に夜

中の11時すぎまで討論し、筆者もよくその討論に参加して意見を述べた。

学生たちの結論は、こうだった。香港での交流を進めるには、こちらが行う報告の内容が面白くなければならない。また、パートナーに事

前に学生を動員してもらえよう工夫しなければならぬ。報告内容を面白くするには、オリジナルなデータをもとにした研究をしなければならない。

学生たちは、日本人観光客が香港に行った際に訪れる場所と、香港人観光客が日本に来た際に訪れる場所を比較してみれば面白いだろうと考えた。そして、旅行会社にインタビューをしたり、各種グループ・ツアーのパンフレットの

### 日韓共同調査（2002年）：比較研究というブレイクスルー

歴史に「もし」は禁物だが、もし2002年度も香港を訪問していたら、現在の「海外ゼミ」は生まれていなかったように思う。

すでに香港中文大学とは、ある程度のコネクションができていた。しかし、「また香港か」という雰囲気もあり、2001年度に参加していなかった学生たちの中に「新しいことをやってみよう」というチャレンジ精神も生まれていた。

2002年は折しも、FIFAワールドカップの日韓共催年。学生たちが「ワールドカップ観戦をめぐる日韓大学生比較研究」をテーマに選ぶまでに、長い時間はかからなかった。

### 早稲田大学における「海外ゼミ」（2005年-）

筆者が早稲田大学のアジア太平洋研究科に異動した最大の理由は、普通の日本の大学教育では経験できない、国際的な環境の中に身を置きたいというものだった。

ところが、これはアジア太平洋研究科ばかりか、現在の勤務先であるITASIAにもいえることだが、学部時代とは異なる問題意識をもって

内容分析を行ったりして、当時徐々に広がりつつあったパワーポイントを用いて興味深い報告をすることに意を砕いた。

その結果、30名近い学生が報告を聞きに来てきたばかりか、報告が終わった後には、調査の方法やデータの解釈をめぐって討論も行われ、一部学生たちは、香港の街中を一緒に見て回る約束をとりつけるほどだった。

学生たちは、FIFAワールドカップ日韓共催をテーマにした調査研究を調べ、自分たちで仮説を作り、質問票を練り上げ、質問票を調査対象者である大学生に配布・回収し、データ入力をしてSPSSを利用して分析を行い、プレゼンテーション用の資料を作成するといった一連の作業を行ったのだが、質問票調査のデータをもとに比較研究を進めるというパターンは、2009年の共同ワークショップまで継承されている。

データの共有化を図り、比較の視点から報告を行うというパターンは、この時期に出来上がった。

入学してくるものの、その問題意識を具体的なリサーチクエストにするための知的訓練を受けてこなかった者が多くいる。それに比べれば、中央大学の学部学生の方がよほど調査リタラシーを身につけている。そこで筆者は、中央大学の学部生とアジ太の大学院生による「合同海外ゼミ」を計画した。

中央大学の学生14名、早稲田大学の大学院生18名、合計32名が台湾に足を踏み入れたのは、2005年の12月14日。早稲田大学にして初めての「海外ゼミ」は、3泊4日の「合同海外ゼミ」として実施されることになった。

「合同海外ゼミ」の効果は絶大だった。

2005年の台湾ゼミに参加した早稲田の院生は、中大の学部生が身につけた調査リタラシーの高さに打ちひしがれながらも、自分たちのも

### 「海外ゼミ」のゆくえ

中央大学では、パートナーを変えることが学生たちの大きな動機づけになったとすれば、早稲田大学では協力的なパートナーと長期的な関係を維持することが、研究内容の深化と質的向上を図るためにも重要だった。

「海外ゼミ」で得られたデータを用いて博士学位請求論文が出されるなど、ここ最近、レベルの高い論文が刊行されつつある。筆者は、今後の社会学教育、グローバル時代における大学院教育を考えるうえでも、「海外ゼミ」はきわめて有意義な試みだったと自負している。

ところが今年の4月に母校・東京大学に戻り、「海外ゼミ」を復活すべきか、思案してい

つ長所と短所を理解した。それぞれに「こうしたい」「ああしたい」といった願望をもつようになり、学生から「来年は、もっと充実した海外ゼミにしたい」といった希望が表出されるようになった。ちょうど第2回の香港合宿と同じ雰囲気生まれたのだが、その結果、多くの意味ある国際比較可能なデータが作られ、多国間での共同調査が可能なネットワークが構築されるまでになった。

東大の学生がグループワークをどう評価するかわからないばかりか、そもそも何に強いインセンティブを感じるか把握し切れていないからだ。

幸か不幸か、東洋文化研究所が台湾・中央研究院社会学研究所と学術交流協定を結んだことを契機に、2010年の2月に東大の学生を引率して、台湾の博士後期課程学生、ポスドクたちと共同ワークショップを開催する計画を立てている。

このワークショップが今後、「東大版海外ゼミ」に発展していくような気もするのだが、さでどうなることか。



園田 茂人 (そのだ しげと)

昭和36年 秋田県生まれ (49歳)

[専攻領域] 比較社会学、現代中国研究、アジア文化変容論

[主な著書]

『中国人の心理と行動』（NHKブックス、2001年）、『日本企業アジアへ』（2001年、有斐閣）、『不平等国家 中国』（2008年、中公新書：第20回アジア太平洋賞特別賞）など多数

[所属] 東京大学情報学環/東洋文化研究所・教授

[所属学会] 日本社会学会、アジア政経学会など

東京大学大学院社会学研究科博士後期課程中退後、東京大学助手、中央大学専任講師、助教授、教授、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授を経て、2009年より現職